[とよなか山田会ニュースレター]
文化と芸術を愛する人びとの集い

2024.4.10 10

豊中市名誉市民・映画監督

山田洋次氏にエールを送る

とよなか山田会HP

●編集・発行／とよなか山田会　●代表／武市　進　●〒561-0894　豊中市勝部1-1-7　TEL／080-3868-2010
●facebook／toyonakayamadakai.com　●メール／info@toyonakayamadakai.com

黄色いハンカチで山田監督を歓迎（2023.7.15）

[特集]

大先輩となる「山田会」が、1993年（平成５）8月、今からちょうど30年前、
57,456人）に誕生しました。第1回の上映会は、1994年１月、「学校」「同胞」。
「こんにちは、母さん」上映会まで、山田監督作品の自主上映会を営々と続け
長和田康之様ほかスタッフの方々に心からの敬意と声援をお送りします。

ないまち、宮崎県日向市から山田監督を応援

との出会いから30年、
会を26回開催してきました。

山田会　代表　和田康之

昨年7月、26回目の先行上映会を開催
山田監督は、観客とともに映画鑑賞後、挨拶に登壇

山田洋次監督の最新作「こんにちは、母さん」（2023年9月1日公開）の先行上映会を、山田監督と北山雅康さんを迎えて、昨年7月15日に日向市文化交流センターにて開催した。初回の上映会を開催して以降、回数にして26回目、うち、山田監督は18回目の参加となる上映会であった。

登壇された山田監督の「日向は、ぼくにとって特別な場所」という開口のお言葉からはじまり、「素晴らしい観客に囲まれ幸せ」「日向にお邪魔するようになって30年、本当に映画を楽しみにしている皆さんのための映画会で、かつてこういう風に映画はあったんだなってことを僕に思い出させてくれる」、さらに、「映画を取り巻く環境が変わるなか、日向に来ると、また映画への希望を失ってはいけないのだと思わせてくれる」と、想いを語られ、会場は大きな暖かい拍手で包まれ盛況のうちに終了した。

山田監督の嬉しい言葉

上映会からひと月も経たない8月5付け朝日新聞に掲載された山田監督の連載手記と、観客からのアンケートが、山田会の活動や山田映画の力、魅力を客観的に表現されており、僕たちメンバーにとって格別に嬉しい言葉であったので、以下、紹介する。

●『暑い中を宮崎県の日向市に行ってきました。新作「こんにちは、母さん」の先行上映会です。その昔、映画館のないこの街の若者たちがロケーション誘致をめざして僕の作品の特別上映会を企画、それが一回で終わらずに僕が映画を作るたびに開催してくれて今年で30年になる。若者たちはそれぞれ所帯を持って、中には孫がいたりしながら今も頑張ってくれている。僕が挨拶のために市民ホールの壇上に立つと、会場を埋めた1千人の観客が一斉に黄色いハンカチを手にして「お帰りなさーい」と叫んでくれる。この人たちと自分の映画を見るのが実に楽しい。大声で笑う、隣同士で語り合う、スマホをかける人もいる、都会の窮屈なシネコンとはまったく違う気楽な昔の映画見物の世界が僕にはたまらないのです。』
【2023年8月5日付け、朝日新聞「be on saturday」連載『山田洋次　夢をつくる　20』より冒頭部引用】

●『私は、今から13年前、初めて山田会の映画を観ました。その時には「幸福の黄色いハンカチ」だったと思います。その当時、私は主人を亡くして3ヶ月過ぎた頃でした。友人夫婦から誘われて映画を観たのですが、当時、私は腹から笑うということができないんじゃないかと思いこんでいましたが、その映画を観ている時、腹から笑っている自分でした。その時、何だかホッとした自分を見ることができました。』
【「こんにちは、母さん」先行上映会　観客からのアンケートより】

とよなか山田会の大
宮崎県日向市(人口5
以来、2023年7月の
て来られました。会

映画館のな
「同胞」
上映会

「同胞」を観て泣いたことがきっかけで始めた上映会

僕にも、生涯記憶に残っている映画鑑賞の時がある。30年前、映画の公開から17年後に山田監督の「同胞（1975年）」を観た時のことだ。観たといっても、自分の部屋の14型テレビでビデオで観たのだが、映画の後半、ボロボロ頬をつたう涙を、僕の後方で一緒に観ている弟に見られまいとしていたが、弟も一緒に泣いていた。今日まで、この時以上に感動で心に染み入った映画鑑賞はないと言っても過言ではない。それがきっかけとなり、山田監督を招いての上映会開催を企画し、当時の最新作「学校」と併せて、「同胞」を上映した。1994年1月のことである。

日向市でのロケを直談判、監督の返答に天にも登る気持ち

「男はつらいよ　寅次郎の青春（第45作・1992年）」は、宮崎ロケ作品である。僕の住む日向市は宮崎県北部に位置するが、舞台となったのは、県南（日南油津、堀川運河）が中心だった。ミーハーな気持ちで見学に行き、ロケ風景を写真に収めたり、ロケ隊が宿泊するホテルに泊まり山田監督からサインをいただいたりして、初めて見る映画ロケを満喫した。

その後しばらくして思い立ったように、山田監督に2つの直談判をした。

1．わが街、日向市でも「男はつらいよ」のロケをしてほしい。

2．あなたの映画祭を計画したいが、その時に来ていただけないか。

自宅電話口に出ていただいた山田監督は、見ず知らずの若者からのいきなりの一方的なお願いを最後まで、聞いていただいた。そして、「映画ロケの件は、簡単に決められる話ではない。映画祭の件は、スケジュールが合えば行けるので、ぼくのスケジュールを管理している人に連絡を取ってみて。大船撮影所の内藤さんという人で、電話番号は……」と、返答いただいた。天にも昇る気持ちだった。この時、「わかりました。今後、検討します」と、その場を取り繕う返答で終わっていたら、山田会はなかったのである。30年前の山田監督との最初の出会い、やりとりである。

映画館のないまち日向市から応援し続ける

昨年、活動30年という大きな節目を迎えたが、アンケートに書かれていたように、僕たちの活動が、観に来られた方にとって何らかの力、元気を、幸福を感じる活動だとすれば、その人のためだけにでも継続していく意義、使命のようなものがあるのではないかとヒシヒシと感じている。

今後とも、背伸びすることなく、ライフワークとして、映画館のないまち日向市から敬愛する山田監督の映画を応援し続けていきたい。

上映会舞台あいさつの様子（2023.7.15）

□山田会活動経緯　　2024.2.1現在

年	月	日	活　動
1993（H5）	8	19	山田監督の来日向（1994.1上映会）決定を受け「山田会」発足
1994（H6）	1	16	「学校」「同胞」上映会 【山田監督講演①】
	11	19	「男はつらいよ」日向ロケ要望署名簿（11,700名分）、市内写真集等を山田監督へ提出
1996（H8）	1	13	「男はつらいよ　寅次郎紅の花」上映会
	8	11	「学校Ⅱ」先行上映会 【山田監督講演②】
1997（H9）	2	9	「虹をつかむ男」上映会
1998（H10）	2	15	「男はつらいよ　寅次郎ハイビスカスの花・特別編」上映会 【倍賞千恵子さん講演】
	9	26	「学校Ⅲ」先行上映会
2000（H12）	5		「十五才学校Ⅳ」日向市ロケ行われる（21～23日）
	10	14	「十五才学校Ⅳ」先行上映会 【山田監督舞台あいさつ③】
	11	4	「十五才学校Ⅳ」先行上映会 【金井勇太さん、麻実れいさん舞台あいさつ】
	12	19	「十五才学校Ⅳ」市内中学校3校合同鑑賞会 【山田監督舞台あいさつ④】
			ロケ地となった財光寺中学校を訪問し、出前授業、全校生徒との交流会等に出席。給食も生徒と一緒にとるなどして、生徒と交流を深める。
2002（H14）	9	23	「たそがれ清兵衛」先行上映会 【山田監督舞台あいさつ⑤】
2004（H16）	10	9	「隠し剣鬼の爪」先行上映会　【山田監督舞台あいさつ⑥】
2006（H18）	11	23	「武士の一分」先行上映会　【山田監督、檀れいさん舞台あいさつ⑦】
2008（H20）	1	14	「母べえ」先行上映会　【山田監督、檀れいさん舞台あいさつ⑧】
	10	19	日向市駅前広場で開催された「宮崎やまんかん祭り・杉コレクション2008」特別審査員として来市
2010（H22）	1	17	「おとうと」先行上映会 【吉永小百合さん舞台あいさつ】（※山田監督は体調不良により欠席）
	10	31	「幸福の黄色いハンカチ」「京都太秦物語」上映会 【山田監督・倍賞千恵子さん舞台あいさつ⑨】
		31	日向市駅周辺交流拠点施設完成記念祝賀イベントに参加（あいさつ、もちまき）
2011（H23）	10	22	「山田洋次監督生活50周年＆日向市制施行60周年記念　名作上映会」
			「十五才学校Ⅳ」市内中学校2校合同観賞会 【山田監督あいさつ（倍賞千恵子さん出席）】
		23	「男はつらいよ柴又慕情」「遥かなる山の呼び声」「十五才学校Ⅳ」上映会
			【山田監督・倍賞千恵子さん舞台あいさつ⑩】
2013（H25）	1	20	「東京家族」&「ひまわりと子犬の7日間」特別上映会 【山田監督、平松監督舞台あいさつ⑪】
2013（H25）	12	22	「小さいおうち」特別先行上映会 【山田監督、倍賞千恵子さん舞台あいさつ⑫】
2015（H27）	3	28	「家族はつらいよ」特別先行試写会 【山田監督市民と鑑賞・舞台あいさつ⑬】
2015（H27）	12	26	「母と暮せば」特別上映会 【山田監督市民と鑑賞・舞台あいさつ⑭】
2017（H29）	1	15	「家族はつらいよ2 」特別先行上映会 【山田監督市民と鑑賞・舞台あいさつ⑮】
2018（H30）	4	1	「妻よ薔薇のように　家族はつらいよⅢ 」特別先行上映会 【山田監督市民と鑑賞・舞台あいさつ⑯】
2019（R1）	11	16	「男はつらいよ　お帰り　寅さん」特別先行上映会 【山田監督市民と鑑賞・舞台あいさつ⑰】
2021（R3）	7	17	「キネマの神様」特別先行上映会 【山田監督オンライン舞台あいさつ⑱】
2023（R5）	7	15	「こんにちは、母さん」特別先行上映会 【山田監督・北山雅康さん市民と鑑賞・舞台あいさつ⑲】

原田神社と神々

清水　篤

清水　篤さん
●豊中市立郷土資料館

原田神社本殿

中世以前から続く原田神社

山田洋次監督の生家に程近い岡町・桜塚の商店街。買い物客で賑わうアーケードの中心に、突如、天が開け、凛とした空間が目に飛び込んできます。能勢街道や桜塚街道（原田道）、伊丹街道などが交差し、現在の豊中市誕生の礎の一つとなった岡町・桜塚地域に根付く、原田神社の境内です。

原田神社は、由緒書きによると、古くは西牧総社と称せられ、天正年間（一五七三～一五九二年）頃からは祇園神祠また大宮殿、天和元年（一六八一年）から貞享四年（一六八七年）まで牛頭天王宮（ごずてんのうぐう）と呼ばれていました。貞享五年（一六八八年）には京都の吉田家より原田大明神の称号を得て、それ以来、原田神社と呼ばれるようになったとされています。

その氏子地区は豊島郡榎坂から、川辺郡富松に至る七十二ヶ村に広がっていましたが、天正六年（一五七八年）に摂津守荒木村重が織田信長に謀反を起こして戦になった際、社殿、神宝、古記録の類が悉く灰燼に帰してしまったことが記されています。

現在の本殿は重要文化財。秋季大祭では「おてんさん」巡行や臥舞の獅子神事

現在の本殿は、慶安五年（一六五二年）に再建された五間社流造の瀟洒な構えで、国の重要文化財に指定されています。また、毎年催行され、多くの人びとが集まる秋季大祭は、「おてんさん」と呼ばれる獅子が氏子地区を巡行したのち、宵宮で臥舞いを行ったり境内の中を追われたりする獅子神事で、市の無形民俗文化財に指定されている勇壮な祭事です。

豊中市内の四社が素戔嗚尊を主祭神とし、牛頭天王と呼ばれていた

現在の原田神社の主祭神は素盞嗚尊（古事記・日本書紀では須佐之男命・素戔嗚尊／すさのおのみこと）ですが、豊中市内では近代に合祀された庄内神社を除いて、八坂神社（熊野町）、春日神社（利倉）、椋橋総社（庄本町）が素盞嗚尊を主祭神としています。そして、驚くべきことにこの四社すべてが、かつて牛頭天王（社）と呼称されていたことがあったのです。

原田神社をはじめ、獅子神事が共通して催行されるこれらの神社は、それぞれの神紋を五葉木瓜（ごようもっこう）とし、同時に三つ巴が用いられることも多く、広義に捉えれば京都東山の八坂神社（祇園社）に連なる祭祀を執り行う神社であることは間違いありません。

八坂神社（祇園社）は桓武朝にはすでに「咳病を除かんため」祭祀を行う社として起こされていて、やがて行疫神であるとされた牛頭天王を祀る社の中心的存在となりました。

平安時代頃の日本は、度々、疫病の大禍に襲われ、厄災を恐れるとともにその鎮まりを願う貴族や民衆の精神状態と相俟って、この牛頭天王信仰が席巻し、元々

（左）素盞嗚尊神社（吹田市）の神紋　（右）原田神社獅子神事

あった地域の社にもその名を冠するようになったのです。現在、八坂という名の神社は二六〇〇社を超え、また同様に牛頭天王を祀る愛知県の津島神社の系列は三千社以上を数えるなど、祇園・牛頭天王信仰というものの広がりを知ることができます。

もうお気づきだと思いますが、この牛頭天王を略し、崇拝しながらも親しみを込めて呼んだものが「おてんさん（御天さん）」だったと考えてよいでしょう。

荒ぶる神「牛頭天王」

では、牛頭天王とはいかなる神なのか。

鎌倉時代に八坂神社（祇園社）で著された『簠簋内伝金烏玉兎集』には、最も古い牛頭天王の説話が記載されています。

それによると、元々は北天竺摩訶陀国の大王でしたが娑婆世界に降臨し牛頭天王となったもので、頭には黄牛の面、するどい両角があり、その異形のため后を持つことができなかったため、南海の龍宮にいる妃を求めて旅に出ます。長旅に疲れ、南天竺夜叉国の巨旦大王に宿を求めて拒絶されたあと、貧乏な蘇民将来にもてなされて無事に龍宮に達することができました。龍宮で八人の王子をもうけた後、北天竺への帰路の途上で巨旦大王を殲滅し、恩のある蘇民将来には、「自分はこの後、行疫神となり王子たちとともに国に乱入するが、お前とその子孫は守護する」と約束し別れたのです。

豊中市やその他の地域でも、発掘調査によって「蘇民将来之子孫也」と墨書された呪符木簡が数多く見つかっており、平安～鎌倉時代にこの説話に示されたことを実践して、民衆が厄災から逃れようとしていたことがよくわかります。

また、牛頭天王は、厄災から逃れたいのであれば、巨旦大王を徹底的に調伏するため、鏡餅は（巨旦大王の）骨肉、草餅は皮膚、結粽は鬢髪、索麺は筋、黄菊の酒は血脈、蹴鞠は頭、（弓矢の）的は眼、門松は墓験と思って、五節の祭礼を違えず行えとも言っていて、現代でも身近なものがこの説話に関係することが知られ、伝統的な行事になぞらえた、とても興味深い記述です。

この説話からは、近世以降に広まった勧善懲悪という概念ではなく、牛頭天王が持つ、疫病を蔓延させて祟る側面と逆に厄災から守ってくれるという側面を合わせ持つ性格をそのまま受け入れた、中世の人々のある種矛盾したともいえる思想が窺えるのです。

商店街から見た原田神社

素盞嗚尊との習合

仏教世界から神仏習合によって行疫神となった牛頭天王は、中世後期に天津神である素盞嗚尊と習合します。素盞嗚尊は、あまりの暴虐ぶりに高天原から追放されてしまうような悪神であったものが、やがて善神として君臨するようになり、牛頭天王信仰と重なる部分が多かったのでしょう。古い説話には無い茅の輪が厄災除けに加わるようになるのもこの頃のことです。

応仁の乱後、中世の神道を独自の解釈で集成整理した京都吉田神道が習合を進めたため、牛頭天王を冠した神社が次々と素盞嗚尊を主祭神として社名をも変えていったと考えられます。

感染症が猛威をふるい、大規模災害が多発する現代まで、脈々と続く牛頭信仰

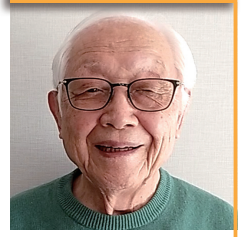
豊中市を含む北摂や西摂地域に限ってみても、現在、素盞嗚尊を主祭神とする神社は九十社を超えていますが、平安時代の「延喜神名式」に記載された式内社はごくわずかです。中世の民衆はある程度の力を持ち、独立した自治を行っていたと考えられていますから、牛頭天王を祀る地域の小規模な社でも、より強い勢力に紐づけることで、その信仰を守ろうとしたのではないでしょうか。

感染症の猛威にさらされ、大規模な災害が頻発する現代。季節の移り変わりを感じつつ、チマキを食べたり、茅の輪をくぐったりする時に、いにしえの牛頭天王の説話に思いを馳せてみてはいかがでしょう。

〔主な参考文献〕
脇田晴子『中世京都と祇園祭』中央公論新社（平成十一年（一九九九年））
川村　湊『牛頭天王と蘇民将来伝説』作品社（平成一九年（二〇〇七年））
別冊歴史読本『日本「神社」総覧』新人物往来社（平成三年（一九九一年））
『日本の神々の事典』学習研究社（平成九年（一九九七年））

岡町南の想い出

堀江　宏



堀江　宏さん
●1929年（昭和4年）生まれ
克明小学校、豊中高校（旧制豊中中学）大阪医科大学卒業
隠退内科医

70年ぶりの岡町は…

私は七十余年ぶりに豊中市に舞い戻って来ました。と言っても現住所は千里中央ですから、生まれ故郷の岡町南界隈とは少し距離があります。竹藪ばかりであった千里山の変貌ぶりも少しはわかってきたところで、思い立って岡町に足を踏み入れました。

阪急の高架化であっけなく母校を通過

バスを乗り継ぎ、阪急豊中駅から一駅の乗車でしたが、母校の克明小学校が高架で味気なく通過したので、我々の在学中に線路脇まで拡張された運動場も見ることはできませんでした。交通の利便性を考えると、これは納得して岡町駅下車。いよいよ勝手知った道筋をたどりながら萬歳橋にやって来ました。

懐かしい谷田公園と萬歳橋

昔、谷田池だったところが公園になっていました。谷田公園です。昭和初期の池を見た人はいま何人居られるでしょうか。堤のような萬歳橋が左右に池を分断しており、しかも常識外れで、橋とは橋脚に支えられて水路を越えるものと承知していましたので、橋と呼べるか疑問でしたが、公園になったことで奇妙な橋はお役目を終ったようです。

北詰には欄干に使われた石柱と、無造作に埋められ「萬」のみ読み取れる銘石とが埋まっているのは少し悲しい気がしました。しかし本来漑（かんがい）池であったことに由来する流出口が階段と共に残っていることは救いでした。我が家は池まで300メートルのところにあり、母は遊びに行くとき「池にハマりなや！」が口癖でした。「おにやんま」の宝庫で、昆虫採集セットではなく、「とりもち」なるものをつけた竹の穂先を振りかざしてのトンボとり（現在は禁止されている）はスリリングで、下手をすればドボンでしたが、暗くなるまで頑張りました。

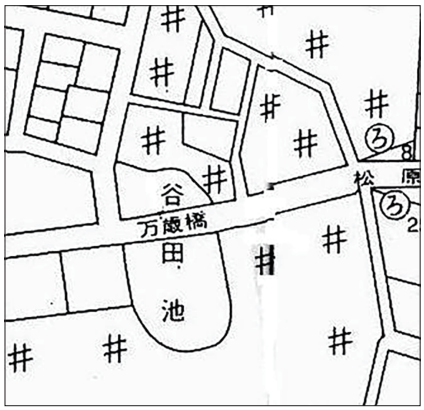
超光寺幼稚園の1期生

もう一つ目を引いたのが超光寺幼稚園です。私は94歳、卒園第1期生なのです。当時は池に阻まれた園庭で窮屈に遊んでいましたが、現在は建物が南に移転しており、ゆったりお遊びができると思いました。

当時の豊中は町から市に変わり、希望に満ちた街が広がっていました。夕方になると各家の門灯がともり、子供は明日の遊びを楽しみに家路についたものです。

泥だらけで遊んだ私は、その後、旧制豊中中学（現豊中高校）へ通い出しましたが、その頃には日本に軍国主義の暗雲が立ち込め、暗い岡町がやって来つつあったことをかみしめながら生まれ故郷を後にしました。

道路の部分が昔の萬歳橋



谷田公園から見る超光寺幼稚園

谷田池と萬歳橋を背に筆者

「七人の侍」を久しぶりに見て

沢良木和生

沢良木和生
●1930年生まれ
学生運動で同志社大学退学。建設業経営
2000年以来、市民活動に参加
ミニコミ誌発行・創作活動

最後まで観てしまいました

この一月、NHKテレビで「七人の侍」を観ました。あまり興味がなかったのですが、勘兵衛（志村喬）や久蔵（宮口清二）が登場するシーンを見ているうちに引き込まれ、最後まで見てしまいました。

これは、ウィキペディアによると、常に回している三本、ときには八本のカメラ、一本の望遠レンズによる撮影から生まれた結果だそうで、なるほど、このように撮れば、真っ正面からしっかりと迫力ある演技が掴めるんやな、と思いました。

天正十四年（一五八六年）春のこと

さてこの物語は、いつ頃のお話なのか。ウィキの解説によると、丙戌天正十四年（一五八六年）春の頃だそうです。一五七九年、摂津の荒木村重が信長に背き、一五八二年、信長、本能寺で明智光秀に攻められ自刃。同年光秀山崎の戦で滅亡。一五八三年、柴田勝家越前北荘城で自殺。一五八七年島津義久、秀吉に降伏。一五九〇年、小田原城降伏。一五九一年、秀吉、朝鮮出兵発令。まさに戦国時代末期、騒乱の時代です。

襲撃してくる野伏（のぶせり）から村を護るために、米飯一杯のみを代償に宿場町を往来する強そうな武士を探す百姓たち。巧みなシナリオの展開で、ともかく七名の武士を雇い入れることができます。ここから二時間ほどの長いストーリー、可憐な恋愛、訓練中のエピソード、凄絶な復讐や襲撃戦が次々と展開、その迫力に圧倒されます。

ですが、この物語の中、細かい部分はさておき、納得できない部分が二か所、ありました。

雨の中の火縄銃

最後の決戦のときの大乱戦。降りしぶく豪雨。

その中で、剣客久蔵が、鉄砲で撃たれて斃れます。そのとき彼は、撃ってきた方角へ愛刀を投げ、射手の居場所を知らせます。それを見た菊千代（三船敏郎）が、女たちの避難している倉庫に隠れた敵将を打ち取ろうと迫っていく中、自分も二発目の銃弾を受けて倒れます。必死で起ち上って、長尺の愛刀（長巻か）を一筋に差しつけて、歩一歩迫りながら敵の大将を刺し殺します。三船敏郎の執念に満ちた圧巻の場面でした。

しかしこの鉄砲シーンは、本当はあり得ないはずです。というのは、雨中では火縄が消えてしまって、銃弾の発射は不能となるからです。このときの久蔵と菊千代の戦死は、残念ながら事実としては起こり得ません。シナリオに無理があると思いました。

生き残った侍の生き方

もうひとつ、納得できないのはラストシーンです。百姓たちの喜びがみなぎる田植風景を背景に、闘いに倒れた侍たちの四つの土饅頭を見つめて、勘兵衛は呟きます。「結局は、勝ったのは百姓たちで、我らはまた負け戦だった」。

まことに哀愁に満ちた述懐で、映画はこれで終わり、生き残った三人の侍は、再び仕官先を求めて放浪の旅に出ると予想され、この物語の悲劇性が強調されます。

しかし、ここであえて言いたいのです。放浪の旅に出てもはや初老。いかに軍学軍事に優れていようと無事就職先が見つかる保証はなく、野垂れ死ぬかもしれない。

それなら、この村に居ついて地侍となり、ここで土豪となる道を選ぶべきではなかったか。いうならあの殲滅した野伏と重なる道です。

滅亡した野伏から解放された近隣の集落に呼びかけ、田畑を豊かにすることができる。馬という強力な生産手段を持つことができたし、鉄砲も手に入れて武装力も向上した。ただ、闘争力団結力は弱いから、武士が中心となって闘う組織となり、わが身で産んだ生産をわが身で守る固い集団をつくる。そういう土豪が、この時代、各地で勃興しています。

家名由緒が必要なら作ればいい。一番手っ取り早く、お互い信頼し合うことができる、共に戦った百姓と武士ではありませんか。

もちろん、侍と百姓との間に様々な葛藤があるでしょうが、それは両者が今後を生きることを考えれば、まことに小さな問題。それも新しい時代を開く物語となるに違いありません。豊中でも古い時代、熊野田や原田で、土豪が盤踞していたらしい。

この映画が企画された1950年代初頭、黒沢監督や橋本忍さんや小国英雄さんなどの優れた脚本家に、そうした力強い民衆史の新しい研究が届いていなかったと思われ、物語とならなかったのが残念でなりません。